

飯塚村内遺跡

—道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2018

高崎市教育委員会
ビーグル不動産株式会社
有限会社 毛野考古学研究所

飯塚村内遺跡

—道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2018

高崎市教育委員会
ビーグル不動産株式会社
有限会社 毛野考古学研究所

例 言

1. 本書は、道路築造に伴う飯塚村内遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市飯塚町字村内548番地、578番地1、579番地に所在している。
3. 本調査および整理作業は、ビーグル不動産株式会社・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書作成・刊行に至る経費は、開発原因者であるビーグル不動産株式会社に負担して頂いた。
5. 発掘調査は、日沖剛史・山本杏子・田村貴広（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、空堀は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が行った。整理調査は、山本・田村が行った。
6. 発掘調査・整理作業は平成30年2月23日～平成30年7月31日の期間で実施した。
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「722」である。
8. 本書の執筆についてはIを高崎市教育委員会、それ以外を山本が担当し、編集は山本が行った。
9. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。

【発掘調査】

北野進二 小関泰洋 佐藤潤雄

〔遺構測量〕 石塚伸輝 小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）

【整理作業】

小野沢絹子 田村貴広 真下弘美

11. 発掘調査から報告書の刊行に至る過程で、下記の機関・諸氏のご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）
伊藤明宏 中村岳彦 三浦京子 金子ハウス

凡 例

1. 挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いている。
2. 遺構図および遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを付して表示した。
3. 土層・土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006）を用いた。
4. 土層説明における含有物の量は、大量（50%以上）・多量（30～49%）・中量（15～29%）・少量（5～14%）・微量（1～4%）と表記した。
5. 本書掲載の第1図は高崎市発行1/2,500『高崎市都市計画基本図』、第2図は、国土地理院発行1/200,000地形図『長野』・『宇都宮』、第4・21図は国土地理院発行1/25,000地形図『高崎』・『前橋』・『下室田』・『富岡』を一部改変引用した。
6. 遺構略称は、竪穴住居跡：S1、溝：SD、土坑：SK、ピット：P、性格不明遺構：SXとした。
7. 遺物実測図におけるトーンは以下のとおりである。それ以外については図中に明記した。

：還元焙焼断面

目次

例言・凡例			
目次・図版目次・表目次・写真図版目次			
I 調査に至る経緯	1	第2節 第2面の調査	9
II 地理的・歴史的環境	2	1 竪穴住居跡	9
第1節 地理的環境	2	2 ビット	12
第2節 歴史的環境	3	第3節 第1面の調査	13
III 調査の方法と経過	5	1 溝	13
第1節 調査の方法	5	2 土坑	15
第2節 調査の経過	5	3 ビット	17
IV 基本層序	5	4 性格不明遺構	18
V 検出された遺構と遺物	6	5 遺構外出土遺物	18
第1節 第3面の調査	6	VI まとめ	19
1 畝状遺構	6	報告書抄録	
		写真図版	
		奥付	

図版目次

第1図 調査区位置図	1	第12図 P-10	12
第2図 遺跡の位置	2	第13図 SD-01～05	13
第3図 周辺の遺跡	4	第14図 第1面全体図	14
第4図 基本層序	5	第15図 SD-01出土遺物	15
第5図 畝状遺構	6	第16図 SK-01～10	16
第6図 第3面全体図	7	第17図 P-1～9	17
第7図 第2面全体図	8	第18図 SX-01	18
第8図 SI-01(1)	9	第19図 遺構外出土遺物	18
第9図 SI-01(2)・SI-01出土遺物	10	第20図 推定東山道驛路と コップ形須恵器・度量衡遺物出土遺跡	21
第10図 SI-02(1)	11		
第11図 SI-02(2)・SI-02出土遺物	12		

表目次

第1表 SI-01出土遺物観察表	11	第5表 土坑一覧表	15
第2表 SI-02出土遺物観察表	12	第6表 ビット一覧表	17
第3表 溝一覧表	13	第7表 遺構外出土遺物観察表	19
第4表 SD-01出土遺物観察表	15		

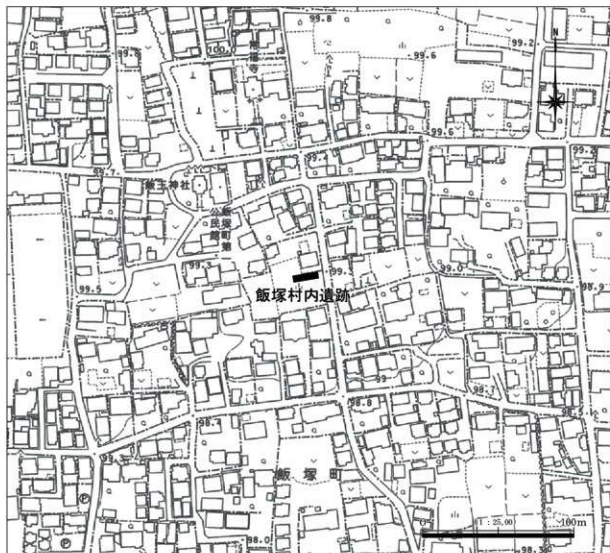
写真図版目次

P.L. 1 遺跡の位置と周辺の地形 調査区遠景		SI-01 貯蔵穴杭跡2土層断面	
P.L. 2 第2・3面全景 第1面全景		P.L. 4 SI-02 遺物出土状況 SI-02 遺物出土状況 SI-02 カマド掘り方全景 SK-01 全景 SK-03 全景 SK-08 全景 SD-01 全景 SD-03・04 全景	
P.L. 3 畝状遺構調査状況 畝状遺構土層断面 畝状遺構土層断面近景 SI-01 全景 SI-01 カマド全景 SI-01 貯蔵穴遺物出土状況 SI-01 貯蔵穴杭跡1土層断面		P.L. 5 出土遺物	

I 調査に至る経緯

平成29年10月、事業者および施工責任者であるビーグル不動産株式会社から、高崎市飯塚町において計画している宅地造成に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である16-8遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年10月12日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年11月27日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、古墳時代から平安時代の集落跡を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「飯塚村内遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成30年1月22日にビーグル不動産株式会社と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また平成29年12月20日にビーグル不動産株式会社・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



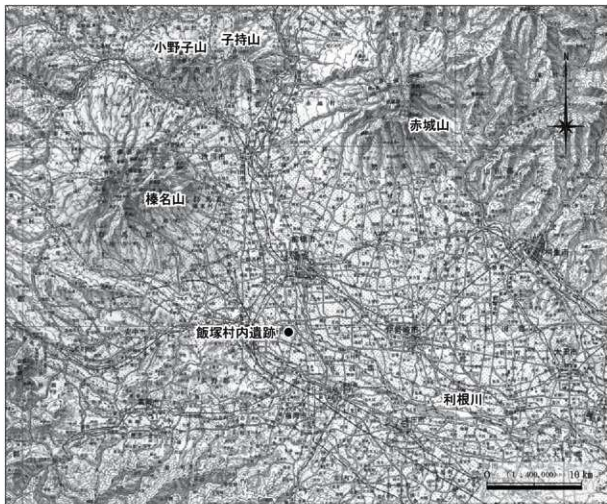
第1図 調査区位置図

II 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

飯塚村内遺跡は、高崎台地上の微高地に立地する。高崎台地は、およそ井野川低地帯と烏川左岸の間の平坦な地形をさす。この台地の形成は、約1万～1万1000年前、前橋台地上に高崎泥流が堆積したことによるものとされている。なお、前橋台地は、約2万1000年前に発生した前橋泥流によって形成されたもので、その範囲はおおよそ広瀬川と烏川の間とされる。これら高崎台地・前橋台地を含む地形は前橋・高崎台地と総称される。また、ここから北西方向を望むと、相馬ヶ原扇状地を目にすることができる。相馬ヶ原扇状地は、火山山麓扇状地で、榛名山南東麓を扇頂部とし、扇端部付近では緩やかな傾斜となる。形成は約1万3000年前とされており、榛名山南東部の溶岩円頂丘崩壊に伴う「陣場岩屑なだれ」の堆積によるものとされる。また、前橋泥流堆積物から高崎泥流堆積物の間には、約2万年前に浅間山より降下したAs-BP Group (浅間板鼻褐色軽石群)、同じく約1万3000年前の軽石であるAs-YP (浅間板鼻黄色軽石)などが確認されている。

本遺跡周辺の地形は、高崎台地形成以後、完新世における各河川の侵食・堆積の影響を受け、微高地と低地が入り組んだ様相を呈している。本遺跡から北東方向は、井野川の後背湿地、井野川の自然堤防と続いている。南西方向は、烏川の後背湿地との境界に接している。周辺遺跡を概観すると、微高地には集落・畠跡、低地には水田跡が調査されている。



第2図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺で遺構が確認され始めるのは、縄文時代前期からであり、当該期には熊野堂遺跡(36)における住居跡等がある。より近い地域での事例が目立ち始めるのは、弥生時代中期以降である。この時期の集落としては、稲荷町1遺跡(28)などで堅穴住居跡が検出されている。このほか、弥生土器の出土や包含層の存在が貝沢・高遺跡(30)や飯塚・貝沢稲添遺跡(1~3)で、環濠集落の一部である可能性のある溝が上並榎南遺跡(13)において報告されている。生産遺構としては、並榎北遺跡(15・16)で4世紀初頭に降下したとされる浅間C軽石(As-O)に被覆された水田跡が調査されている。

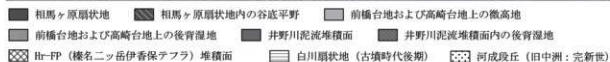
続いて、古墳時代の集落を概観すると、前期および中期後半~後期の集落は散見されるが、中期前半~中葉の集落は少ない傾向にある。その一例として熊野堂遺跡(37)が挙げられ、この遺跡では5世紀前半の「空白期間」を経て再び住居跡がみられるようになる。また、特徴的な集落としては、上並榎屋敷前遺跡(12)、並榎台原遺跡(11)等があり、古墳時代後期の住居跡から白玉などの未成品が出土しており、滑石製製造品の工房も兼ねていたとみられている。生産遺構としては、榛名二ッ岳川テフラ(Hr-FA:6世紀初頭降下)やこれに伴う泥流に被覆された水田跡・畠跡の検出例が報告されている。水田跡は、間屋町西遺跡(31)、貝沢・天神遺跡(29)、並榎町1遺跡(17)など数多く存在する。これらの水田跡は「極小区画水田」と呼ばれ、一区画あたりの面積が少ない特徴をもつ。畠跡については、水田跡と比較すると調査例は少ない。部分的な検出が多いが、可能性を有する畝状遺構は、本遺跡を始め、芦田貝戸遺跡(42・43)、御布呂遺跡(44)で検出されている。集落の増加、生産域の拡大に伴い、古墳も大規模なものが作られるようになり、全長約120mとされ、舟形石棺を持つ前方後円墳である上並榎稲荷山古墳(22)などが確認されている。

奈良・平安時代に入ると、集落の範囲はさらに広がりをもせ、それまで墓域・生産域とされていた場所や、微高地の狭い範囲にも集落が営まれるようになる。本遺跡・下小島遺跡(32)では8~9世紀、熊野堂遺跡では7~11世紀の住居跡が発見されている。また、融通寺遺跡(34)では、7世紀末から8世紀初頭頃までに出現した集落が平安時代まで継続する。生産域としては、浅間B軽石(As-B:1108年降下)に被覆された水田跡の検出が数多く、浜川地区を含む本遺跡周辺の特徴とも言える。例として、飯塚西金井遺跡(6・7)、上並榎八反田遺跡(25)などがある。なお、本遺跡から北東方向に位置する大八木水田遺跡(33)を含む一帯は、条里に沿った水田地帯が広がっていた可能性が考えられている。その他、推定東山道駅路の2つのルートが重要視されている。9~10世紀に利用された「国府ルート」は御布呂遺跡ほかを通り、7~8世紀に利用された「牛堀・矢ノ原ルート」は、本遺跡の南西約700mを通ると想定される。また、大八木屋敷遺跡(35)では、群馬郡八木院に比定される掘立柱建物跡群が検出されている。

中世の上野国は、武田氏、北条氏、上杉氏といった武士団が割拠していた。とくに現在の高崎市域では、長野氏の力が大きく、一族に関連する城館址が残っている。また、市街を流れる長野堰は中世末期、長野氏の開削と伝えられる(大江 2000)。なお、本遺跡の北方約120mには、水祿墳(16世紀後半)築城の上飯塚城(46)があったとされる。これは和田氏の支配域に所在しており、並榎城(14)・下之城・大類城とともに、15世紀中葉から16世紀末まで存続した和田城を囲む外壁の一つであったとされる(大西他 1985)。上飯塚城の外堀、内堀内と想定される部分が飯塚・貝沢稲添遺跡(2・3)で調査されている。

【主要引用・参考文献】

- 大西賢広他 1985『上並榎南遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査委員会
大江正行 2000『第1編 高崎地域の生活と文化 Ⅲ 人々の暮らし』『新編 高崎市史 通史編2 中世』高崎市史編さん委員会
関口 修・五十嵐 信 2003『第5章 古代の高崎 四 交通路の整備と飯塚荘付 1 東山道と人々の生活』『新編 高崎市史 通史編1 原始古代』高崎市史編さん委員会
高橋真人 2016『飯塚・貝沢稲添遺跡』高崎教育委員会
中村正芳 2003『第1章 歴史の舞台としての高崎の自然 一 高崎の自然の特色』『新編 高崎市史 通史編1 原始古代』高崎市史編さん委員会
丸池 浩 2016『飯塚貝沢稲添遺跡2』高崎市教育委員会
山崎 一 1979『群馬県古墳型址の研究 補遺編 上巻』群馬県文化事業振興会



1. 飯塚村内遺跡 2. 飯塚・貝沢原遺跡 3. 飯塚・貝沢原遺跡 4. 飯塚貝沢原遺跡 5. 飯塚大苗代遺跡
6. 飯塚西金井遺跡 7. 飯塚西金井Ⅱ遺跡 8. 飯塚雁田Ⅱ遺跡 9. 飯塚大苗東遺跡 10. 昭和田Ⅰ遺跡 11. 並根台原遺跡
12. 上並根原敷前遺跡 13. 上並根南遺跡 14. 並根城址 15. 並根北遺跡 16. 並根北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡 17. 並根町Ⅰ遺跡
18. 上並根下松遺跡 19. 上並根下松Ⅱ遺跡 20. 上並根下松遺跡 21. 上並根下松遺跡 4 22. 上並根稲荷山古墳
23. 上並根御料所遺跡 24. 上並根御料所Ⅱ遺跡 25. 上並根八反田遺跡 26. 筑磯遺跡群 27. 飯玉Ⅰ・Ⅱ遺跡 28. 稲荷町Ⅰ遺跡
29. 貝沢・天神遺跡 30. 貝沢・島遺跡 31. 間屋町西遺跡 32. 下小島遺跡 33. 大八木水田遺跡 34. 融通寺遺跡 35. 大八木風敷遺跡
36. 熊野堂遺跡第Ⅰ地区 37. 熊野堂遺跡第Ⅱ地区 38. 熊野堂遺跡第Ⅲ地区 39. 大八木・伊勢原遺跡 2 40. 小八木遺跡
41. 芦田貝戸遺跡 42. 芦田貝戸Ⅱ遺跡 43. 芦田貝戸Ⅲ遺跡 44. 御布呂遺跡 45. 上小嶋稲荷山古墳 46. 上飯塚城址

第3図 周辺の遺跡

III 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

表土除去は、0.25㎡バックホーを用いて行った。表土除去後、人力による遺構検出および遺構掘削を行った。遺構掘削は、適宜ベルト設定を行い、土層堆積状況を記録した。

遺構測量は、トータルステーションおよび電子平板を用い、平面図および断面図を作成した。座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、調査の進捗状況に応じて撮影し、35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・デジタルカメラ（1000万画素相当）を使用した。

遺物接合は、溶剤系接着剤（セメダインC）を用い、エポキシ系樹脂で部分的に補強した。遺物の写真撮影は、センサーサイズAPS-Cのものを使用した（Nikon D7000。遺構・遺物トレース、写真加工、版組はそれぞれAdobe IllustratorCS2、Adobe PhotoshopCS2、Adobe InDesignCS2を使用した。

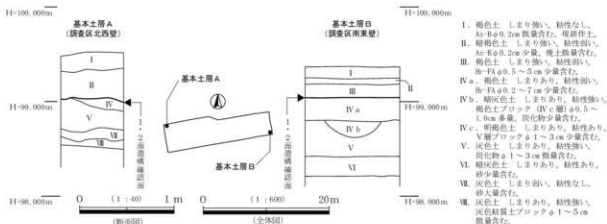
第2節 調査の経過

現地での発掘調査は2018年2月24日～2018年3月19日まで行った。

2月24日：発掘器材の搬入。27日：重機搬入。重機による表土除去。簡易トイレの搬入。重機搬出。発掘補助員動員。28日：第1面の調査に着手し、遺構確認を行う。6日：第1面の平面測量・基本土層調査の実施。一部第3面の調査に着手する。7日：第1面の調査を完了し、第2面の調査に着手する。14日：第2面の平面測量の実施。住居跡の掘り方調査に着手する。19日：空撮・第2・3面の平面測量の実施。高崎市教育委員会による完了検査。発掘器材の搬出。現場作業を全て完了する。

IV 基本層序

基本層序は調査区南東壁・北西壁で確認した。I層は耕作土層でAs-Bを含む。II層はAs-B混土層、III層はIV a層との漸移層である。IV a層はHr-FA泥流堆積物層であり、この上面を第1・2面の遺構確認面とした。IV b層は薄く堆積し、この下にIV c層が確認される。被覆・侵食の状況により、確認されない箇所もある。V～VII層は洪水層である。V層は灰色粘質土であり、このブロックが遺構の覆土に混入する。VI層は同じ灰色土だが、砂を多く含み粘性は弱い。VII層はV層と近似する。VIII層は砂質である。



第4図 基本層序

V 検出された遺構と遺物

本遺跡では、文化層ごとに3面にわたり調査を行った。それぞれ第1面はAs-B降下以降、第2面はHr-FA泥流堆積以降、第3面はHr-FA泥流堆積以前を遺構確認面とした。遺構は、第1面で溝5条・土坑11基・ピット9基・性格不明遺構1基、第2面で竪穴住居跡2軒・ピット1基、第3面で畝状遺構1面を検出した。以下、帰属時期の最も古い第3面の調査から、遺構確認面ごとに記載する。

第1節 第3面の調査 (Hr-FA泥流直下の調査、古墳時代後期)

1 畝状遺構

第1・2面の遺構確認面であるIV a層以下の遺構を確認するため、調査区北壁に沿ってトレンチを設け、このトレンチ内で畝状遺構を検出した。位置は、X=38565グリッド、Y=-74570~-74560グリッドである。

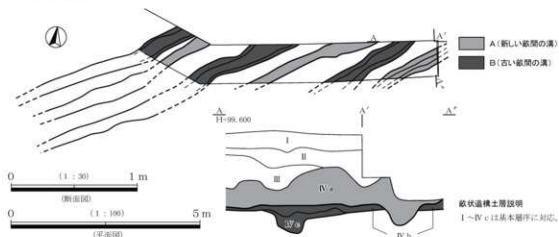
畝間の溝は6条確認された。検出した範囲内の最大幅は0.80m、最小幅は0.15mである。走行方向は概ねN-54°-Eを測り、ほぼ同一の方向に並走する。当初、これらの溝については、水田跡に伴う疑似畦畔の可能性を考えていたが、直交して走行する溝状の掘り込みはなく、古墳時代の小区画水田にみられる長方形を呈する区画は確認されなかった。このため、並走する溝の性格を畝跡と判断した。遺存状態は、トレンチ掘削の際に畝の上部を削平したが、その他の部分については良好である。断面形状については、畝は台形状、畝間の溝は逆台形状を呈する。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

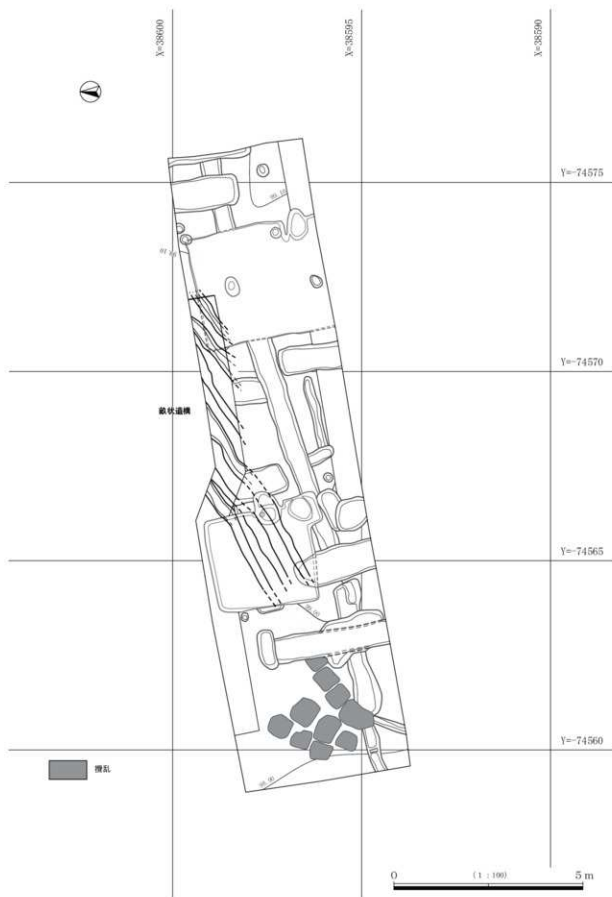
埋没土は畝間の溝部分に堆積しており、その内容から畝間の溝をAとBの2時期に分類した。

A：畝間の溝がHr-FA軽石を含む褐色土 (IV a層) で埋没

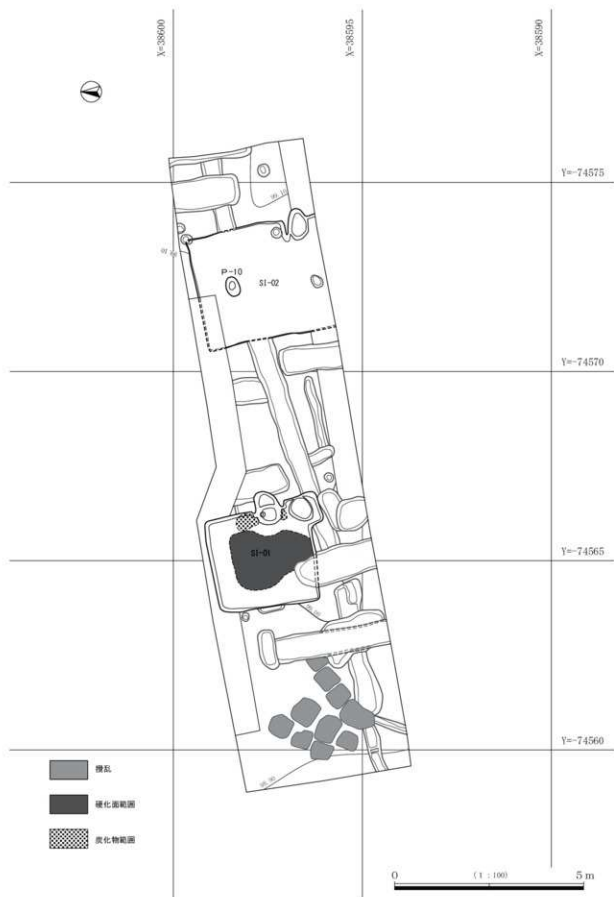
B：畝間の溝が混入物のほとんど認められない褐色土 (IV c層) で埋没

なお、土層断面をみると堆積順は下からV層、IV c層、IV b層、IV a層であり、このうちV層は古い耕作土にあたる。また、IV b層は、混入物のほとんど認められない灰色土である。Bの溝はほぼIV c層で埋没しており、その上位にIV b層が薄く堆積する状況に対し、Aの溝はIV b・IV c層を掘り込んでいる。このことから、AはBよりも新しいと判断できる。この新旧関係は、Aの時期からBの時期の間に畝替えが行われた可能性を示唆している。帰属時期は、埋没土からAは6世紀初頭、Bについては、詳細は不明だが6世紀初頭以前の時期である。





第6図 第3面全体图



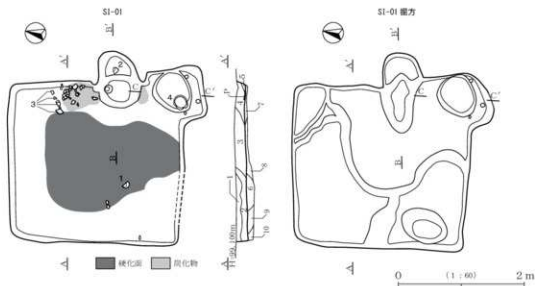
第7図 第2面全体図

第2節 第2面の調査 (Hr-FA 泥流層上面、奈良・平安時代)

1 竪穴住居跡

SI-01号住居跡

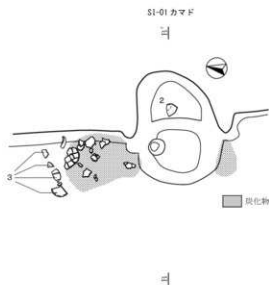
位置: X=38595, Y=74570・74565。時期: 8世紀後半～9世紀前半。規模: 長軸2.72m、短軸2.56m、深さ0.26m。主軸方位: N-77°-E。平面形態: 隅丸方形を呈する。重複関係: SD-01・SK-04・05・07・08・11・P-5・7と重複し、埋没土の観察から、本遺構が最も古い。埋没状況: 暗褐色土を主体とした自然埋没と想定される。床面の状態: 全体的に平坦で、南東側に顕著な硬化面が認められた。カマド: 東壁の南寄りに設置される。袖は灰色粘質土によって構築される。全長は0.91m、燃焼幅は0.67mを測る。主軸方位はN-77°-Eである。北袖内側に直径約13cm・深さ約7cmの窪みが認められることから、袖の構築材として縄を用いていた可能性がある。柱穴: 柱穴は認められなかった。貯蔵穴: 貯蔵穴は住居の南東コーナーに位置し、南壁面から張り出した状態で検出された。これは東壁に設置されるカマドと住居南壁とが近接し、貯蔵穴を設置する十分なスペースが確保できなかったためと思われる。なお、貯蔵穴南隣に直径約5cmの円形状を呈するピットが3基検出されている。これらのうち2基(杭跡1・2)については、断り割り調査の結果、断面形が下に向け細長く尖ることが確認されたことから、杭の打ち込みと考えられる。壁周溝: 壁周溝は認められなかった。掘方: 全体的に貼床が認められる。底面は凹凸が顕著で、南西部は周辺の底面より15cm程低い。遺物出土状況: 遺物はカマド北隣および、住居中央やや西寄りに偏在する状態で出土した。カマド北隣からの出土遺物は、床面直上あるいは床面から4cm程高い位置、住居中央やや西寄りからの出土遺物は、床面から7cm程高い位置で出土した。また、カマド内からは須恵器破片が出土し、貯蔵穴からは土師器甕が正位の状態出土している。この甕は、貯蔵穴底面より10cm程高い位置に留まっていた。



SI-01土層説明

1. 灰褐色土 しまり無い、粘性ない、褐色土ブロックφ0.5～1cm少量、Hr-FAφ0.5～1cm少量、炭化物φ0.2cm微量含む。
2. 灰褐色土 しまりあり、粘性ない、褐色土ブロックφ0.5～1cm少量、Hr-FAφ0.5～3cm少量、炭化物φ0.2～1cm微量含む。
3. 灰褐色土 しまり無い、粘性ない、Hr-FAφ0.5～0.6cm少量、炭化物φ0.5～1cm、褐色土ブロックφ0.5～1cm微量含む。
4. 灰褐色土 しまり無い、粘性弱い、Hr-FAφ1～2cm・褐色土ブロックφ1～5cm、灰少量、焼土・炭化物φ0.5～1cm微量含む。
5. 原褐色土 しまり弱い、粘性やや強い、炭化物多量、Hr-FA泥流ブロックφ0.5～1.0cm少量、焼土・Hr-FA軽石φ0.5cm微量含む。
6. 灰褐色土 しまりあり、粘性強い、Hr-FAφ0.5～1cm少量、褐色土ブロックφ0.5cm・焼土・炭化物φ0.5～1cm微量含む。
7. 暗褐色土 しまり強い、粘性弱い、Hr-FAφ0.5～1cm・褐色土ブロックφ1～3cm少量、焼土・炭化物φ0.5～3cm微量含む。
8. 暗褐色土 しまりあり、粘性弱い、褐色土ブロックφ2～3cm多量、Hr-FAφ0.5～1cm・炭化物φ1～2cm微量含む。
9. 暗褐色土 しまりあり、粘性弱い、Hr-FAφ0.5～2cm微量・褐色土ブロックφ0.5～2cm・炭化物φ0.5～2cm微量含む。
10. 灰褐色土 しまりあり、粘性あり、Hr-FA0.3～1cm微量含む。

第8図 SI-01 (1)

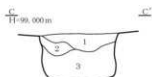
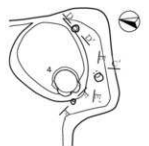


SI-01 カマド土層説明

1. 褐色土 しまり強い、粘性ない。
Hr-FA ϕ 0.5cm 微量含む。
2. 灰褐色土 しまりあり、粘性弱い。
Hr-FA ϕ 0.5cm・焼土・炭化物 ϕ 0.5~1cm 微量含む。
3. 灰褐色土 しまりあり、粘性強い、Hr-FA ϕ 0.5~1cm・焼土 ϕ 0.5~1cm 炭化物微量含む。
4. 暗褐色土 しまりあり、粘性弱い、Hr-FA ϕ 0.5~1cm 少量、焼土 ϕ 0.5~1cm・炭化物 ϕ 0.5~1cm 微量含む。
5. 暗褐色土 しまりあり、粘性弱い、焼土 ϕ 0.5~3cm・灰少量、Hr-FA ϕ 0.5cm・炭化物 ϕ 0.5~3cm 微量含む。
6. 灰褐色土 しまり弱い、粘性ある、炭化物 ϕ 0.3~2cm・灰少量、Hr-FA ϕ 0.5cm・焼土 ϕ 0.5~1cm 微量含む。
7. 暗褐色土 しまり強い、粘性弱い、Hr-FA ϕ 0.5~1cm・焼土・炭化物微量含む。
8. 灰褐色土 しまりあり、粘性あり、Hr-FA ϕ 0.5cm・炭化物 ϕ 0.5~1cm 微量含む。



SI-01 貯蔵穴・貯蔵穴結核



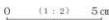
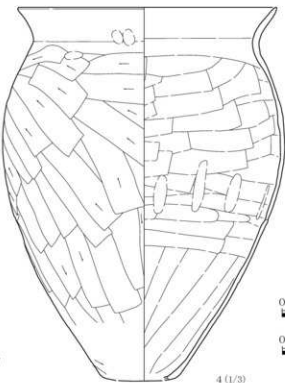
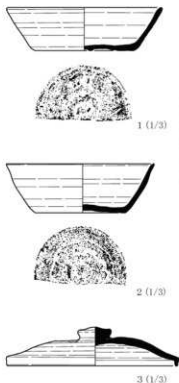
9. 暗褐色土 しまりあり、粘性あり、褐色土ブロック ϕ 0.5~3cm 少量。
Hr-FA ϕ 0.5cm・炭化物 ϕ 0.5~2cm 微量含む。
10. 褐色土 しまり強い、粘性強い、Hr-FA ϕ 0.5~1cm 少量、焼土・炭化物 ϕ 0.5~3cm 微量含む。

SI-01 貯蔵穴土層説明

1. 灰褐色土 しまりあり、粘性弱い。
Hr-FA ϕ 0.5~1cm・灰色結核土ブロック ϕ 0.5~3cm 多量、炭化物 ϕ 0.5~1cm 微量含む。
2. 褐色土 しまりあり、粘性弱い。
Hr-FA ϕ 0.5~1cm・灰色結核土ブロック ϕ 0.3~3cm 多量、炭化物 ϕ 0.5cm 微量含む。
3. 灰色土 しまり弱い、粘性強い、Hr-FA ϕ 1~2cm・褐色土ブロック ϕ 0.5~1cm・炭化物 ϕ 0.5~1cm 微量含む。

SI-01 貯蔵穴結核土層説明

1. 暗褐色土 しまり強い、粘性弱い。
Hr-FA ϕ 0.2cm・砂少量含む。



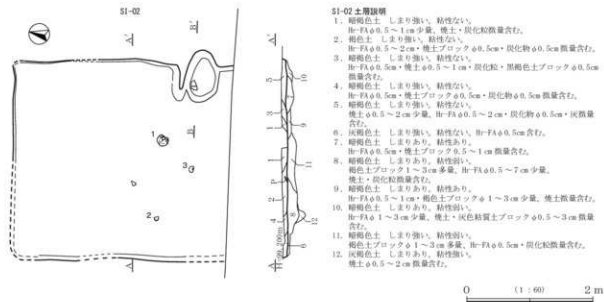
第9図 SI-01 (2)・SI-01 出土遺物

遺構名	番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
SI-01	1	須恵器 坏	口径: 12.4 底径: 7.8 器高: 3.4	①還元焼 ②外-灰 内-灰 ③白色粒・褐色粒・黒色粒・チャート ④1/2	内外面コテの整形。底部同様に切り 残す。	
	2	須恵器 坏	口径: (11.7) 底径: (7.2) 器高: 3.9	①還元焼 ②外-灰 内-灰 ③白色粒・褐色粒・褐色粒 ④1/2	内外面コテの整形。底部同様に切り。 残す。	
	3	須恵器 蓋	口径: 13.5 底径: - 器高: 3.1	①還元焼 ②外-灰 内-灰 ③チャート・褐色粒・白色粒 ④完形	内外面コテの整形。天井部右側にヘラ ケズリ。外面および内面に自然釉。履 き床部の輪み足付。	
	4	土師器 罎	口径: (20.5) 底径: (5.6) 器高: (29.6)	①酸化焼 ②外-に灰い層 内-層 ③白色粒・褐色粒 ④ほぼ完形	外周: 白線部ヨコナデ。指取部。胴部へ ラケズリ。底部ヘラナデ。 内面: 白線部ヨコナデ。胴部～底部へ ラナデ。接合部にユビナデ。	
	5	石製品 粘銅線り	長さ: (1.25) 幅: (2.6) 厚さ: 0.6 重さ: 2.17g /滑石製。小破片。未成品とみられるが、明確な器種は不明。表・裏面の一部に銅線焼・研磨痕が認められる。			
	6	鉄製品 鏝	長さ: (4.5) 幅: 2.1 厚さ: 0.3 重さ: 13.16g			

第1表 SI-01 出土遺物観察表

SI-02号住居跡

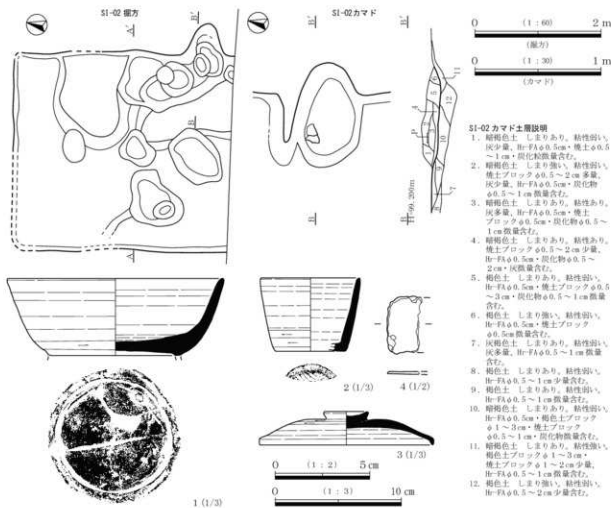
位置: X=38595, Y=74560。時期: 8世紀後半～9世紀前半。規模: 長軸(3.42)m、短軸3.05m、深さ0.15m。主軸方位: N-77°-E。平面形態: 隅丸長方形と想定される。南側は調査区外に及ぶ。重複関係: SD-01・02、P-3・8・9・10と重複し、埋没土の観察から、本遺構が最も古い。埋没状況: 暗褐色土を主体とする自然埋没と想定される。床面の状態: 全体的に平坦で、硬化面は認められなかった。カマド: 東壁の南寄りに設置される。袖は灰色粘質土によって形成されている。全長は0.83m、燃焼部幅は0.52mを測る。主軸方位はN-79°-Eである。柱穴: 柱穴は認められなかった。貯蔵穴: 検出範囲内において貯蔵穴は認められなかった。壁間溝: 壁間溝は認められなかった。掘方: 全体的に貼床が認められる。底面は凸凹が顕著で、高低差は約5cm程である。カマド前は15cm程低い。遺物出土状況: 形状を保つ遺物はおもに住居中央南側に集中し、床面直上あるいは床面より4cm程高い位置で出土した。なお、覆土中の土師器・須恵器片は散在して出土した。カマド内からは土師器甕片が出土している。掘方からは土師器小破片が多く検出される。



SI-02土層構成

1. 暗褐色土 しまり強い、粘性ない。
Hr-Ft ϕ 0.5～1cm少量、焼土・炭化粒微量含む。
2. 褐色土 しまり強い、粘付ない。
Hr-Ft ϕ 0.5～2cm・焼土ブロック ϕ 0.5cm・炭化物 ϕ 0.5cm微量含む。
3. 暗褐色土 しまり強い、粘性ない。
Hr-Ft ϕ 0.5cm・焼土 ϕ 0.5～1cm・炭化粒・黒褐色土ブロック ϕ 0.5cm微量含む。
4. 暗褐色土 しまり強い、粘性ない。
Hr-Ft ϕ 0.5cm・焼土ブロック ϕ 0.5cm・炭化物 ϕ 0.5cm微量含む。
5. 暗褐色土 しまり強い、粘性ない。
焼土 ϕ 0.5～2cm少量、Hr-Ft ϕ 0.5～2cm・炭化物 ϕ 0.5cm・炭粒微量含む。
6. 灰褐色土 しまり強い、粘性ない、Hr-Ft ϕ 0.5cm含む。
7. 暗褐色土 しまりあり、粘性あり。
Hr-Ft ϕ 0.5cm・焼土ブロック ϕ 0.5～1cm微量含む。
8. 暗褐色土 しまりあり、粘性強い。
褐色土ブロック1～3cm少量、Hr-Ft ϕ 0.5～7cm少量。
焼土・炭化粒微量含む。
9. 暗褐色土 しまりあり、粘性あり。
Hr-Ft ϕ 0.5～1cm・褐色土ブロック ϕ 1～3cm少量、焼土微量含む。
10. 暗褐色土 しまりあり、粘性強い。
Hr-Ft ϕ 1～3cm少量、焼土・炭化粒土ブロック ϕ 0.5～3cm微量含む。
11. 暗褐色土 しまり強い、粘性強い。
褐色土ブロック ϕ 1～3cm少量、Hr-Ft ϕ 0.5cm・炭化粒微量含む。
12. 灰褐色土 しまりあり、粘性強い。
焼土 ϕ 0.5～2cm微量含む。

第10図 SI-02 (1)



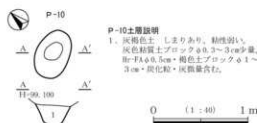
第11図 SI-02(2)・SI-02出土遺物

遺構名	番号	器種	法量(cm)	①焼成	②色調(内/外)	③胎土	④残存	成・整形技法の特徴	備考
SI-02	1	瀬器 罎	口径: (17.2) 底径: — 器高: (6.0)	①還元焼	②外-灰白 内-灰白	③白色胎・紫色粒	④口縁~底部4/5	内外面ロクロ整形。外面体部下端同軸へタケズリ、底部同軸へタケ切り後へラナズリ、縦筋付。高台付。	高台は2根彫、摩滅。
	2	瀬器 コップ形土器	口径: (6.5) 底径: (5.4) 器高: 5.8	①還元焼	②外-灰 内-灰	③紫色粒・白色粒・褐色粒	④口縁~底部1/4	内外面ロクロ整形。外面体部下端同軸へタケズリ、底部同軸表面切り後同軸へラケズリ。高台無付なし。口唇は調整は良い。	
	3	瀬器 壺	口径: 13.8 底径: — 器高: 2.6	①還元焼	②外-灰白 内-灰	③紫色粒・白色粒	④天井部2/3	内外面ロクロ整形。外面天井右側同軸へタケズリ。外面および内面に自然熱。腹状の輪み掛け付。	
	4	陶製品 不明品	長さ: (1.9) 幅: 3.0 厚さ: 0.15 重さ: 2.86g / 板状を呈する。わずかな変形は新の跡のみ。						

第2表 SI-02出土遺物観察表

2 ピット

ピットは1基を検出した。位置はX=38595グリッド、Y=74560グリッドである。規模は0.53m×0.36m、深さは0.26mである。柱痕は認められなかった。P-10の埋没土には、As-Bが含まれず、Hr-FAが含まれることから、帰属時期はAs-B降下(1108年)以前となり、先述したSI-01-02(8世紀前半)に近いものと推測される。遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第12図 P-10

第3節 第1面の調査 (As-B混入土層の調査、1108年以降・1783以前)

1 溝

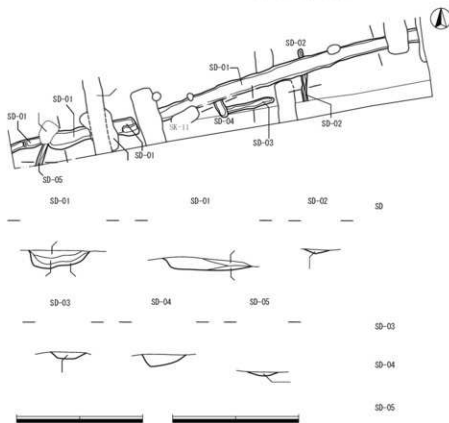
溝は5条を検出した。SD-01は調査区全体を東西に走行する。平面形は調査区南西部で一部途切れる部分が認められるが、埋没状態と平面形態から、同一遺構と判断した。東側部分は直線的に走行し、幅に大きな変化はみらず、底面の状態はほぼ平坦である。一方、西側部分は平面形態が不整形で、西へ向かうにつれ幅が狭くなる傾向にあり、底面に凹凸がみられる部分と平坦な部分が認められる。遺物は、竊葉弁文の青磁碗片が出土している。これは、遺構の時期を決定づけるものとはいえないが、本遺跡の北に所在し、中世城址とされる上飯塚城との関連を示す可能性があるといえよう。

SD-02～05は、埋没土がいずれもSD-01とほぼ同様の混入物を含む暗褐色土であり、SD-01との関連をもつ可能性が考えられる。

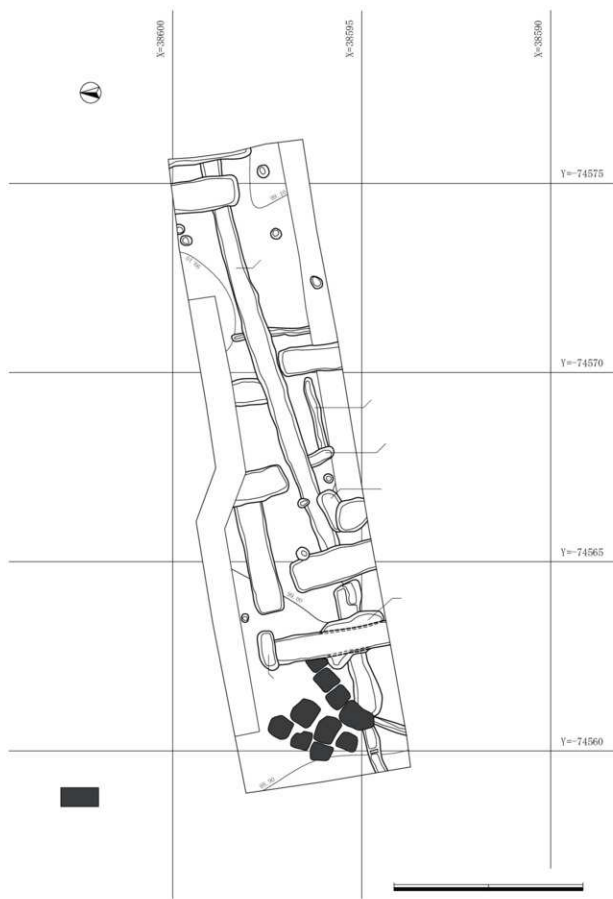
SD-01～05の帰属時期は、埋没土からAs-B降下(1108年)からAs-A降下(1783年)の間とみられ、いずれにも流水の痕跡は認められない。計測値は以下に示す。

遺構名	位置	上端幅 最大値 (m)	上端幅 最小値 (m)	下端幅 最大値 (m)	下端幅 最小値 (m)	残存深度 (m)	主軸方位	断面形	遺物	その他
SD-01	Y=38590・38585, Y=74575～74555	0.73	0.31	0.52	0.25	0.25	N-74°-E	逆台形	青磁碗片	
SD-02	Y=38595, Y=74560	0.23	0.16	0.30	0.04	0.07	N-6°-W	逆台形	-	
SD-03	Y=38595, Y=74565	0.28	0.13	0.15	0.07	0.08	N-77°-E	逆台形	-	
SD-04	Y=38595, Y=74565	0.36	0.31	0.23	0.21	0.05	N-27°-W	逆台形	-	
SD-05	Y=38590, Y=74570	0.24	0.19	0.12	0.06	0.04	N-17°-E	逆台形	-	

第3表 溝一覧表



第13図 SD-01～05



第14图 第1面全体图



第15図 SD-01出土遺物

遺構名	番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
SD-01	1	青磁 碗	口径: - 底径: - 器高: -	①明焼 ②内外・釉薬・明オリーブ灰 胎土一灰白 ③白色粒・黒色粒 ④破片	外底: 結露半文。 内底: ロタ口整形。	13世紀末葉 ～14世紀前半。

第4表 SD-01出土遺物観察表

2 土坑

土坑は11基を検出した。このうち、SK-05・07・11については、主軸方位は概ねN-73°-Eを指す。この主軸方位は、先述したSD-01(N-74°-E)とほぼ平行する。また、SK-04・08については、主軸方位は概ねN-17°-Wを指し、SD-01とほぼ直交する。これらのことから、SK-04・05・07・08・11は、SD-01と共通の土地区画に基づいて作られた遺構の可能性が考えられる。

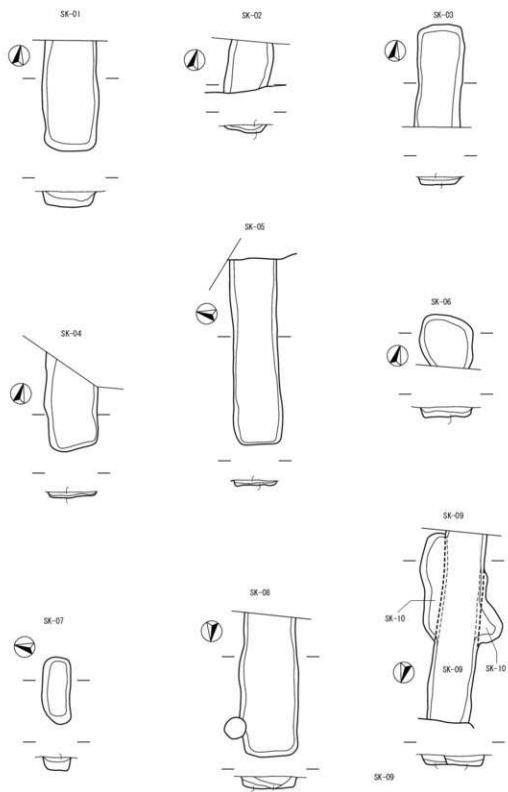
SK-01～03・09については、主軸方位は概ねN-8°-Wを指す。また、平面形は隅丸長方形または溝状である。このことから、SK-01～03・09は、関連性を共有する遺構と考えられる。

SK-06・10については、平面形が不整形であり、出土遺物も少ない。用途等は不明である。

SK-01～11の帰属時期は、出土遺物に乏しく詳細は不明だが、埋没土からAs-B降下(1108年)からAs-A降下(1783年)の間とみられる。計測値は以下に示す。

遺構名	位置	規模(m)	残存深度(m)	形態	主軸方位	遺物	その他
SK-01	X=38395・38600, Y=74560～74555	(1.75) × 0.9	0.26	平面形: (隅丸長方形) 断面形: 逆台形	N-7°-W	-	
SK-02	X=38595, Y=74565	(0.86) × 0.72	0.13	平面形: (隅丸長方形) 断面形: 逆台形	N-8°-W	-	
SK-03	X=38595, Y=74655～74560	(1.54) × 0.74	0.16	平面形: (隅丸長方形) 断面形: 逆台形	N-8°-W	-	
SK-04	X=38595, Y=74565	(1.42) × 0.68	0.13	平面形: (隅丸長方形) 断面形: 逆台形	N-17°-W	-	
SK-05	X=38595, Y=74570～74565	(2.94) × 0.79	0.16	平面形: (隅丸長方形) 断面形: 逆台形	N-77°-E	-	
SK-06	X=38590・38595, Y=74565	(0.75) × 0.68	0.16	平面形: (不整形円形) 断面形: 逆台形	N-15°-W	-	
SK-07	X=38595, Y=74570	1.07 × 0.45	0.24	平面形: 不整形 断面形: 逆台形	N-79°-E	-	
SK-08	X=38590・38595, Y=74570～74565	(2.19) × 0.95	0.24	平面形: (隅丸長方形) 断面形: 逆台形	N-16°-W	-	
SK-09	X=38590・38595, Y=74570	(3.01) × 0.70	0.20	平面形: (溝状) 断面形: 逆台形	N-10°-W	-	
SK-10	X=38590・38595, Y=74570	1.94 × 1.09	0.12	平面形: (不整形) 断面形: (逆台形)	N-40°-W	-	
SK-11	X=38595, Y=74565	(1.13) × (1.06)	0.18	平面形: (隅丸長方形) 断面形: (逆台形)	N-64°-E	-	

第5表 土坑一覧表



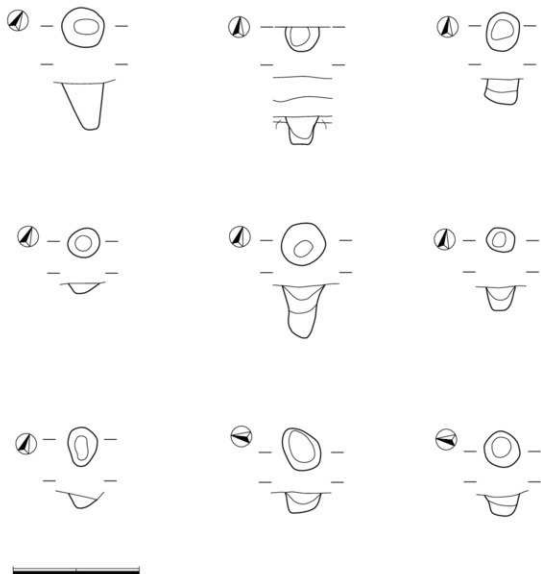
第16图 SK-01 ~ 10

3 ビット

ビットは9基を検出した。いずれも柱痕は認められず、掘立柱建物跡を構成する状況も確認されなかった。これらのビットの所属時期は、埋没土にAs-Bが含まれることから、As-B降下（1108年）以降とみられる。遺物は主に覆土中から須恵器片が出土したが、付近に位置する他の遺構に伴うものとみられ、各ビットに伴う遺物は出土しなかった。計測値は以下に示す。

遺構名	位置	規模 (m)	残存深度 (m)	遺物	その他
P-1	X-38595, Y-74555	0.34 × 0.31	0.4	—	—
P-2	X-38595, Y-74560	0.27 × 0.25	0.19	—	—
P-3	X-38595, Y-74560	0.31 × 0.27	0.22	—	—
P-4	X-38595, Y-74565	0.26 × 0.23	0.69	—	—
P-5	X-38595, Y-74565	0.36 × 0.34	0.45	—	—
P-6	X-38595, Y-74570	0.22 × 0.18	0.18	—	—
P-7	X-38595, Y-74565	0.31 × 0.24	0.15	—	—
P-8	X-38595, Y-74560	0.36 × 0.27	0.16	—	—
P-9	X-38595, Y-74560	0.29 × 0.28	0.22	—	—
P-10	X-38595, Y-74560	0.53 × 0.36	0.26	—	第2期にも記載あり。

第6表 ビット一覧表

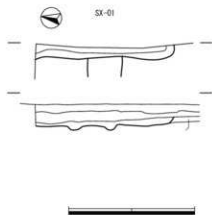


第17図 P-1～9

4 性格不明遺構

SX-01号性格不明遺構

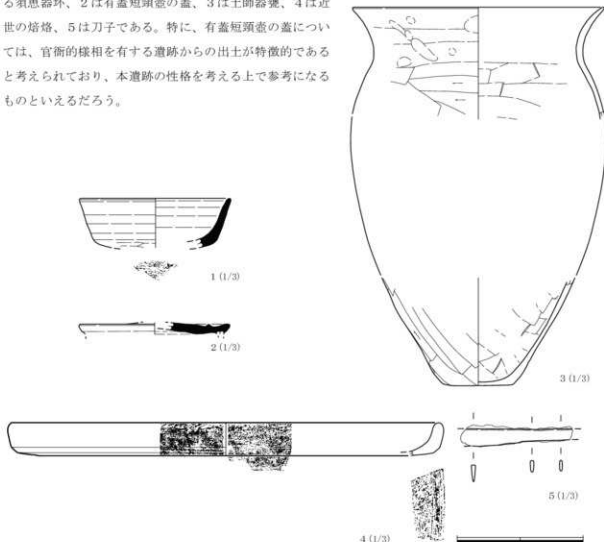
位置：X=38595・38600 グリッド、Y=74555 グリッド。時期：埋没土から、As-B降下(1108年)以降とみられる。規模：長軸(2)m、短軸(0.3)m、深さ0.04m。主軸方位：N-8°-W。これは先述したSK-01～03・09の主軸方位とほぼ同じであり、これらの土坑との関連性が考えられる。平面形態：隅丸長方形または溝状と想定される。北・西側は調査区外に及ぶ。重複関係：SD-01と重複し、埋没土の観察から本遺構が新しい。埋没状況：暗褐色土を主体とする自然埋没と想定される。床面の状態：ほぼ平坦である。遺物出土状況：遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第18図 SX-01

5 遺構外出土遺物

遺構外遺物は5点を掲載した。1は8世紀後半に帰属する須恵器坏、2は有蓋短頭壺の蓋、3は土師器甕、4は近世の焙烙、5は刀子である。特に、有蓋短頭壺の蓋については、官衙の様相を有する遺跡からの出土が特徴的であると考えられており、本遺跡の性格を考える上で参考になるものといえるだろう。



第19図 遺構外出土遺物

遺構名	番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
遺構外	1	須恵器 杯	口径:(12.0) 底径:(9.9) 器高:(5.9)	①還元焼 ②外一灰、内一灰白 ③黒色粒・白色粒 ④口縁～底部片	内外面にクワコ製肌。底面回転ヘラ切り痕、一部ヘラナデ。	
	2	須恵器 蓋	口径:(12.0) 底径:(一) 器高:(1.0)	①還元焼 ②外一灰白、内一黄灰 ③白色粒・黒色粒 ④破片	内外面にクワコ製肌。	有蓋短須恵の蓋、鉄分が表面に沈着。
	3	土師器 甕	口径:(20.0) 底径:5.6 器高:(20.0)	①普通 ②外・内一いり焼 ③黒色胎物・黒色粒・白色粒 ④口縁～体部上半・体部下半～底面 1/5	外面:口縁部コナデ、仰面筋、胴筋、胴部ヘラケズリ、底面ヘラナデ。 内面:口縁部コナデ、胴～底面ヘラナデ。	
	4	帆立陶器 母胎	口径:(34.0) 底径:(33.0) 器高:2.6	①還元焼成 ②外一黒胎、内一いり焼 ③黒色粒・赤色粒・白色粒 ④破片	内外面ナデ。外面底面削り痕。	外面に磁片着。
	5	鉄製品 刀子	長さ:98.90 幅:1.3 厚さ:0.3 重さ:16.55g / 両端部欠損。断面は三角形および楕円形状を呈する。片開。			

第7表 遺構外出土遺物観察表

VI まとめ

本遺跡は、古墳時代の畠跡、奈良・平安時代の住居跡、中世～近世の溝・土坑などの各遺構確認面ごとに異なる様相を呈している。ここでは、本遺跡における土地利用の変遷を概観し、さらに、SI-02で出土した「コップ形須恵器」についての補説を行う。

古墳時代の遺構確認面では、洪水および泥流で埋没した畠跡とみられる畝状遺構が検出された。畝は断面形で明確に認識できる高さをもって残存している。この畝状遺構の土層断面からは、耕作が2時期にわたり行われていたことが読み取れた(p6)。さらに、6世紀初頭以前に発生した洪水、および古墳時代後期(6世紀初頭)のHr-FA降下に伴う泥流のそれぞれが、畝を被覆した様子が確認された。また、Hr-FA泥流による被害は、榛名山噴火の一次災害よりも甚大であり、特に高崎市内の一部では1m以上堆積していたことが観察されている(高崎市 2003)。本遺跡所在地は元来微高地であったものが、この二度にわたる泥流の被覆により、さらに台地化が進んだものと考えられる。なお、今回は調査の都合上、畠跡の調査は部分的な検出に留めた。このため、畠跡がどれほどの範囲まで広がっていたか、全体像は掴みかねる。同時期の畠跡がある遺跡では、畠地は集落内の住居付近の空閑地には小規模に、集落の外縁部分などには広範囲に営まれる傾向にあったとされている(田村 2018)。当該期の住居跡が近隣の遺跡にはみられないことから、畠地としての広がりをもって営まれていたものと思われる。

奈良・平安時代の遺構確認面では、住居跡2軒が検出された。掃属時期はほぼ同時期の8世紀後半～9世紀前半である。この地にHr-FA泥流が襲った後、これらの住居が登場する8世紀頃までについては、遺構の検出がみられず、その間の土地利用は不明である。

ところで、SI-02からは、コップ形須恵器と想定される遺物片が出土している。コップ形須恵器は、小形の須恵器の一種で、「円筒形に近く、片手で握れるような形と大きさ」がその特徴とされる。「コップ形」という名称については、一般化されたものではなく、報告書によっては坏など他器種に分類される場合もある(註1)。現状として、コップ形須恵器が出土する遺構の時期は8～9世紀の間と限定的で、これはSI-02の掃属時期とも一致する。分布域は、東北から九州までと広く、出土例は須恵器全体の出土量に対し極めて少ない。このため、生産には何らかの規制が働いていた可能性が考えられている。用途としては、律令制による度量衡規定のもと、秤に代わる計量器として一般に使用されたと想定されている。また、流通・経済に関連の深い遺物であると位置づけられている(井上 1994)。

群馬県内におけるコップ形須恵器は、前橋市上野国分僧寺・尼寺中間地域ほかで確認されているが、やはり、事例数は少ない。出土する遺跡の性格としては、高崎市国分境遺跡などの寺院の近隣に位置する集落、

あるいは前橋市島羽遺跡などの国衙工場の工人集落からの出土が目立つとされている（神谷・笹澤 2008）。

上記のようなコップ形須恵器出土遺跡の傾向を踏まえると、本遺跡の集落も類似した性格をもつ可能性が考えられるため、以下に周辺遺跡を概観したい。

まず、本遺跡周辺の国衙や郡衙に関連する可能性のある遺跡をみると、大八木屋敷遺跡が挙げられ、ここでは群馬郡別院である八木院に比定される掘立柱建物跡が検出されている。また、下小島遺跡では、公的な性格の強い（中東耕志・井川達雄・大西雅広他 1991『下小島遺跡』）漆紙文書が出土しているほか、融通寺遺跡では遺物などから寺院の存在が推測されている。

さらに、融通寺遺跡、雨垂遺跡、熊野堂遺跡第Ⅱ地区からは、重さを量る度量衡遺物が出土している（神谷・笹澤 2008（註2））。また、本遺跡の南北には、古代の幹線道路である東山道の2つのルートが想定されている。

このように、本遺跡周辺は、寺院を想定させる遺跡・度量衡遺物が出土する遺跡が分布し、東山道2ルートが敷かれる官的な様相が強い地域と捉えられよう。しかしながら、本遺跡における集落の性格を、コップ形須恵器片の出土のみによって、決定づけることはできない。ただし、本遺跡周辺における流通関連あるいは寺院、公的な施設、それに関わる人々の存在も可能性の一つとして考えておきたい。

中世～近世の遺構確認面では、溝・土坑・ピットが検出された。覆土にはAs-Bが含まれ、As-A（浅間A軽石：1783年降下）が含まれていないことから、帰属時期をそれぞれの降下年の間とした。これらの遺構の用途については、判断が難しい。形状や主軸方位から、規格性を垣間見ることできるが、現時点においては、詳細は不明としておく。

なお、同時期に帰属する周辺の遺跡として、北方約120mにある中世の城館・上飯塚城（第3図の46）が存在する。永祿頃（16世紀後半）の築城といわれ、北側が長野領・大八木に接していることから、和田領における北の堡塁として築かれたと推測されている（山崎 1979）。現在判明している城の範囲内には、本遺跡は含まれない。整地を行っていた場合は、地面に硬化が認められるが、そのような部分も、今回の調査では検出されなかった。上飯塚城については、現時点では、飯塚・貝沢堀添遺跡において外堀・内堀とみられる溝状遺構が検出されるなどしているものの、建物や周辺の詳細については明らかになっていない。このため、本遺跡の遺構との直接的な関係については明言できない。ただし、上飯塚城周辺に何らかの施設があったと仮定すれば、今回検出された土坑・溝等の遺構がそれらに関連するものである可能性は、距離や時期を勘案すると十分に考えられるものである。

本遺跡の土地利用をまとめると、弥生時代以来の水田地帯である烏川の後背窪地との境界に近接した微高地に所在しており、Hr-FA泥流の被覆という環境の変化を受けて生産域から集落域へと変化したことが判る。その後、中世までの間に集落は消滅し、さらに別の用途に利用されたと捉えることができよう。

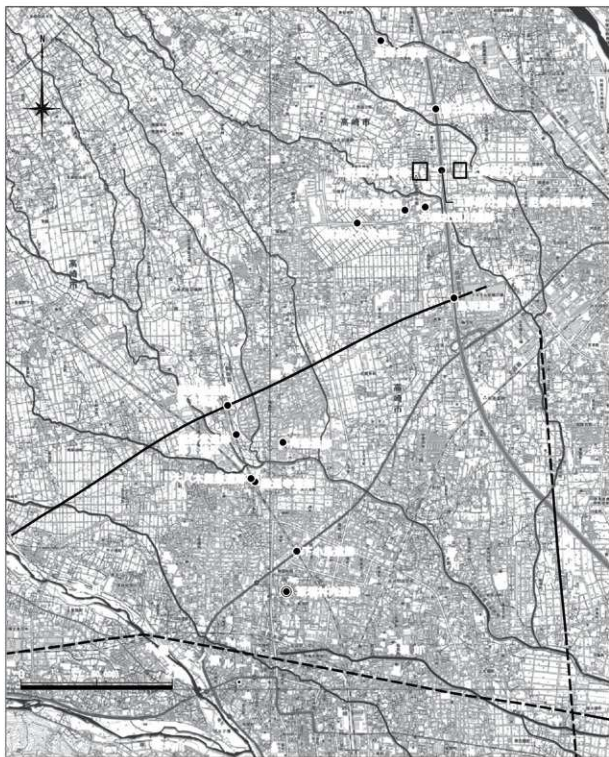
（註1）本遺跡で出土したものは、残存部分から口縁部～底部までが確認でき、その特徴が器形に表れていることから、「コップ形須恵器」の名称が相応すると判断し、これを使用した。

（註2）神谷・笹澤 2008では「権鐘」と称している。

【主要引用・参考文献】

- 麻生敬博 1990 『田分遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 井上尚明 1994 『奈良時代の計量器』『考古学雑誌』第79巻第4号 日本考古学協会
- 神谷佳明・笹澤泰史 2008 『出土度量衡遺物について』『研究紀要』26号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 唐澤真由 2006 『島羽遺跡 G・H・I区』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬県立歴史博物館 2001 『群馬県立歴史博物館第70回企画展 古代のみつらたふし。東山道探訪—』 群馬県立歴史博物館
- 松岡正信・木津博明・友廣哲也 1992 『上野国分寺・足守中園城址（?）』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高島英之他 1995 『大八木埋蔵遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 田村 孝 2003 『第四章 古墳時代の高岡』 大塚隆雄監修と木田 幸 古墳時代中・後期の木田・高岡
- 田村 孝 『新編 高岡市史 通史編1 原始古代』 高岡市市民文化委員会
- 田村 孝 2018 『火山灰に埋没した木出跡・泉跡の調査—一徳名山東高岡を中心に—』『考古学ジャーナル』712号。ニューサイエンス社

中塚謙吉・井川達雄・大西繁広他 1991『下小島遺跡』財団法人群馬県立歴史文化財調査事業団
 中塚謙吉・井川達雄・大西繁広他 1991『藤崎寺遺跡』財団法人群馬県立歴史文化財調査事業団
 森田秀策・飯塚卓二・女塚和志他 1990『熊野史遺跡(2)』群馬県立歴史文化財調査事業団
 山崎 一 1979『群馬県古墳遺址の研究』靖道編 上巻』群馬県文化事業振興会



第20図 推定東山道駅路とコップ形須恵器・度量衡遺物出土遺跡

群馬県立歴史博物館 2001『駅路復原ルート図(2) 上野国
 東山道駅路』名事考に、図17・51参照、2003『東山道駅路と開
 通する道跡』を一部引用

報告書抄録

フリガナ	イツカムラウチイセキ		
書名	飯塚村内遺跡		
副書名	道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査		
巻次			
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第411集		
編著者名	矢島浩 山本杏子		
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Tel 027-265-1804		
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所		
発行年月日	平成30年7月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
飯塚村内遺跡	群馬県高崎市 飯塚町字村内548 番地、578番地1、 579番地	102020	722	36° 20' 42"	139° 00' 09"	20180223	76.5 m ²	道路築造
						～ 20180319		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯塚村内遺跡	生産域	古墳時代	畝跡		Hr-FA混流発生前後の土地利用をそれぞれ捉えることができた。 官儀の様相を示す遺物（有蓋短頸蓋の蓋・コップ形須恵器）の出土が特筆される。
	集落	古代	住居跡 ピット	2軒 土師器 1基 須恵器 石製品 鉄製品 銅製品	
	集落?	中世～近世	溝 土坑 ピット 性格不明遺構	5条 青磁 11基 軟質陶器 9基 1基	

写真図版

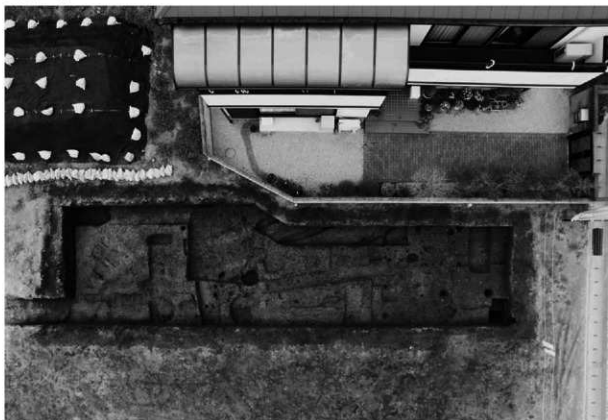


遺跡の位置と周辺の地形 (1885年、上が北)

明治前期測量2万分1フランス式彩色地図(602群馬島上野国
西群馬郡高崎版)、『604群馬島上野国種永郡中農岡村』を合成



調査区遠景 (北東から)



第2・3面全景（上が北）



第1面全景（西から）



畝状遺構調査状況 (南東から)



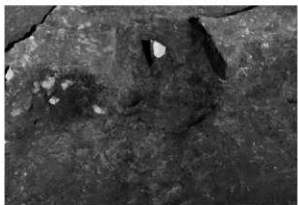
畝状遺構土層断面 (南から)



畝状遺構土層断面近景 (南西から)



SI-01 全景 (西から)



SI-01 カマド全景 (西から)



SI-01 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)



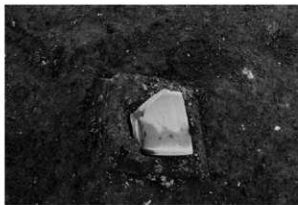
SI-01 貯蔵穴杭跡1 土層断面 (北西から)



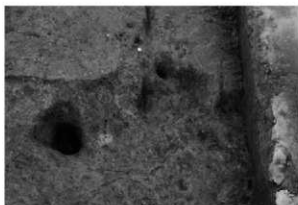
SI-01 貯蔵穴杭跡2 土層断面 (北東から)



S1-02 遺物出土状況 (西から)



S1-02 遺物出土状況 (西から)



S1-02カマド掘り方全景 (西から)



SK-01 全景 (南から)



SK-03 全景 (南から)



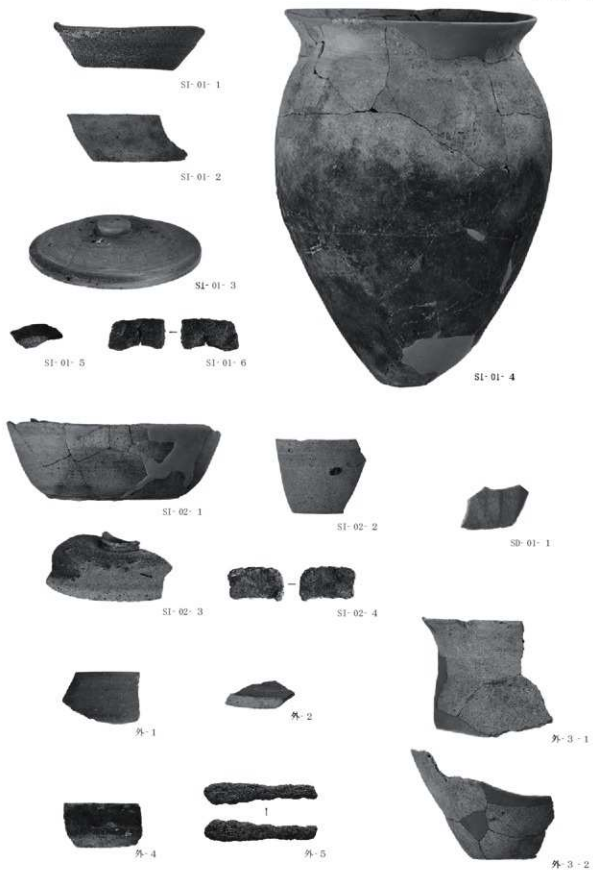
SK-08 全景 (南から)



SD-01 全景 (北東から)



SD-03・04 全景 (東から)



※外-3-1と外-3-2は同一個体。

高崎市文化財調査報告書第411集

飯塚村内遺跡

—道路築造に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成30年7月20日印刷

平成30年7月31日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／有限会社毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社
